



からしだね

2022年3月号
(578号)

キリストの受難 カトリック池田教会

主任：ノノイ・プラザ神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL(ホームページ)：<http://catholic-ikeda.sakura.ne.jp/church/index.htm>



本号の記事の主題など

いのちをまもるための救いの共同体
ミャンマーの平和のための祈り
—いのちをまもるために—
畠 基幸 CP

3月のガラスケースのみことばとその解説
四旬節黙想会のお知らせ
黙想指導はノノイ・プラザ司祭

宝塚黙想会の家からのお知らせ
財務こぼれ話 第六回

みんなの談話室
『古代日本の官僚—天皇に仕えた怠惰な面々』(中公新書)を読んで
今月の表紙絵について

巻頭言

いのちをまもるための救いの共同体

ミャンマーの平和のための祈り —いのちをまもるために—

島 基幸 CP

1月30日の日曜日、2月1日のクーデター勃発後一年迎えるなか、毎月一度は東京在住のミャンマー人のためにミャンマー語ミサがささげられている築地教会で「ミャンマーの平和のための祈り」が行われました。(<https://youtu.be/URQeoHgMTFc>)

「ミャンマー語のミサ？」と意外に思われるかもしれませんが、2006年から日本政府は第三国定住難民受け入れ事業として国際救援センター（RHQ支援センター）を創設し、2008年から主にタイやマレーシアの難民キャンプにいたミャンマー人を受け入れてきました。その数は、50家族194名、日本各地に定住しています。難民認定を済む日本としては多い方です。年間の入国数は、活動資格のビザでは研修生、実習生、学生、技能人材、ビジネスマンとその家族など加えると、総勢8068人（在留外国人統計）ですが、日本社会に在留して定住した在日ミャンマー人は、3万3千人と国籍別では13番目に多い数になっています。

コロナ禍であっても、築地教会の月一回のミサには、20名近いミャンマー人が普段から集まっています。主任のレオ神父、府中教会に赴任しているビンセント神父（ミャンマー、カチン族出身、PIME ミラノ会所属）、それに菊池大司教様が加わり祈りが始まりました。現在の状況やミャンマーの避難している村人やジャングルの隠れ場などがスライドで紹介されました。ミャンマー人の訴えや祈りには、日本のような平和な国になりたいという願いが満ち溢れていました。東京教区は1980年代からミャンマーを支援するために、毎年ミャンマーデーの主日のミサを設けて教区全体の聖堂献金の全額を支援してきたのです。

その援助で神学院や哲学院が建設され、そして近代的な教育設備も整備されました。近年は駆け込み寺のような人身売買の被害者の救済施設や薬物中毒の回復セン



ターなどに支援の重点が変わりつつありました。

ところで、教区時報11月号でも紹介しましたが、パティン教区の聖心小神学校の食堂に掲げられた正面左側の額にはホコラレ（暖炉）-正式名マリアのみ業-運動の要のことばとイエス様（写真）の姿が描かれていて、そこにいたときは何も思わなかったのですが、コロナに感染して亡くなったヨハネ司教（パティン教区教区長）さまを回想してみると、司教様の霊性の本質がよく表されているなど実感しました。「十字架上に見捨てられたイエスは、交わりの霊性の土台、すなわち“出会い”の一つの文化への鍵である」。一つの文化、“兄弟の交わり”のことですが、出会いの鍵は、最も小さく辱められた貧しい人々に対して自分の心の扉を開いた者に与えられるのです。

ヨハネ司教様にとって、小さく見捨てられたイエスは、教区中の小教区の村々で出会う人々だった。そんな訪問に誘われてよく出かけた。車中では、ほとんどの時間はロザリオの祈りをしておられたが、ときどきわたしに声をかけて、日本語のカラオケを聞かしてくださった。ちなみに、車はトヨタの白のランドクルーザー、ナビは日本語の音声のままだった。ミャンマー政府が無償で得た車を宗教施設に配分したもので、2017年にフランシスコ教皇が訪問したときから、カトリック教会もその恩恵を受

けるようになったとのこと。ヨハネ司教様は、その車で、教区内の貧しい村落や家庭を訪問して、まずロザリオの祈りをして、歓迎の食事を喜んで食べるというスタイルだった。私はこんな不衛生な所でもものが食べられるのかという顔だったらしい。司教さんから日本の胃腸薬があるから大丈夫と手渡された。こんなカラクリもあったが、16教区ある中でもっとも神学生が多いことが納得できた。教区内に6つの孤児院、そのうち5つが教区の運営だった。竹の建築材、飲み水の販売、鶏卵と鶏肉の販売、教区の運営で孤児院の費用を賄っていた。親のない子供たちに目をかけ、職のない青年たちには、タイの工業地帯の地元の教区と姉妹教区になって集団就職先でも、司祭2人とシスター3名を同伴させて面倒をみていた。霊的なことだけでなく教区民の生活の向上を心にかけておられたのだ。突然の司教様の死。そして混迷を深めるミャンマー。司教様が生きておられればどんな方策をとられただろうか。

クーデターから1年たった今、国軍の暴挙によって、国民は二つに分断されてしまった。アウンサン・スーチ率いる国民民主連盟(NLD)の総選挙の勝利は、パンドラの箱を開けてしまったかのように、この国の矛盾を全世界に露呈してしまった。国軍は、決して民主主義を認めていなかったのだ。国軍と議会の二頭政治を図って憲法を制定していた。しかも国民の下にある国軍ではなく、国軍の下に国民がある形にしたのだ。憲法改正を選挙の公約にして戦った国民民主連盟が圧勝したのは当然かもしれない。国軍が言う選挙違反というのは、この公約自体のことだったと思う。NLDの公約は国軍の解体を意図したものだった。総司令官は、それ故に緊急事態の発令は当然で、クーデターでないと。しかし、国民感情を無視した暴挙は、特に若い世代に怒りと失望を与えた。初めはデモと不服従運動で抵抗した。この中で、パンデミックもそうなのだが、貧しい人たちが、貧困なうえにさらなる極貧へと滑り落ちた。

冷戦時代に活躍したウ・タント事務総長の孫タンミンウー氏は、破綻国家になった

場合のシナリオを描いている。「国連開発計画は、国民5500万の内半数が極度の貧困に陥ると予測し、国連世界食糧計画も350万人が危機的な飢餓に瀕する。(一部省略)最も深刻な困窮状態に追い込まれるのは、つねにもっとも脆弱な立場に置かれた人々だ。すなわち、土地を持たない人々、高地の農民、季節労働者、ロヒンギヤの人々、南インドの子孫、そして国内避難民となっている人々である」(「ビルマ・危機の本質」タンミンウー著、河出書房新社刊 p356)。

パンドラの箱にはすべての災いが出て行ったあとには、希望の粒が残ったという話ですが、ミャンマーの未来に希望があるのだろうか、心はかき乱されます。学校も行けない栄養不良の子供たちの未来は、貧困の連鎖しかない。子供たちは、最も小さく見捨てられたイエスだ。若者たちの将来の夢が消された。学校は2年間も閉ざされたままだ。都会地は概ね収束してきているが、少数民族への攻撃は過激さが増した。平和で静かな山間の村々が焼き払われ、女の子たちがジャングルに逃げて避難民となった。テロリストとして男たちは、手あたりしだい殺された。国軍の兵士たちは、強盗のように村人の家を襲い財産を奪った。教会の支援活動も、彼らの標的になり、支援物資を運んだ人たちが殺され、支援金が奪われた。教会の聖堂も爆撃され、砲撃され、聖堂に逃げ込んだ人たちが殺された。教会が長年宣教して司牧してきた地域が荒らされ、信者たちは国内避難民となった。インドシナ難民のように大量の難民が国外へと移住する日は遠からずやってくるのではないか。

私たちは対岸の火のようにニュースを見るだけですが、その日は確実にやってくることでしょう。私たちは、命を守るために何ができるのでしょうか。

「ミャンマーの平和のための祈り」において、菊池大司教様は、「パンデミックの二年間、わたしたちは他者のいのちを守るために、互いのために支え、祈り、連帯することを学んできました。『一人で助かる

人は誰もいない』と教皇様の言われるとおりです。ミャンマーに対して、リーダーや為政者の上に聖霊が注がれ人々のいのちが守られる政治が行われるように祈りましょう。平和がミャンマーに一日も早く回復しますように。(2022.1.30築地教会。説教

要旨)」と、説教を祈りで結ばれました。

私たちは四旬節を迎え、教会がいのちを守るための救いの共同体であることを新たに思い起こす日々となりますように祈ります。

3月のガラスケースのみことば
理解されるよりも、理解することを
愛されるよりも、愛することを
 アッシジの聖フランシスコ
 (福音宣教委員会撰)

3月のみことばについての解説 ノノイ・プラザ神父

このみ言葉はアッシジの聖フランシスコが唱えた祈りの中の有名な一節です。

この祈りでアッシジの聖フランシスコが言いたかったことは、自分自身ではなく、他の人を優先することの大切さです。したがって、それは利他の心と自己犠牲の祈りに等しいものです。

よく考えてみれば、この祈りはキリストの生き方に自分も近づきたいという願いに他なりません。イエスご自身がマルコ10:45の中で、「人の子(イエス・キリスト)は仕えられるためではなく、仕えるために、また多くの人の贖いとして、自分の命を捧げるために来たのである。」と言っておられます。

当時と比べて、現代社会はとても便利になり、自分一人で生活することが可能となりました。これは残念ながら、ともすれば不健康な自己愛を生む可能性を秘めています。自己愛だけで一生を過ごすことは可能ですが、このままでは空虚で無意味な人生になってしまいます。キリストは、真に充実した人生を過ごす秘訣は人のために自分を無にすることであると私たちに示されました。

皆さんご存知の芥川龍之介の「蜘蛛の糸」には、多くの罪を犯した大泥棒に対してお釈迦様が示された慈悲の心が描かれています。この大泥棒は生前行った一匹の蜘蛛を助けた善い行いに対して、お釈迦様が慈悲の心で報いてくださったのに、自己中心的な行いのために、結局再び地獄に落ちてしまいました。

このお話は仏教に関係することですが、キリスト教にも通じるものがあります。

自分自身だけに夢中になり続けることは、神様から愛されているにも関わらず、その愛を人に分かち合っていないこととなります。神は自分自身のことよりも他人を優先する人に対して王国への扉を開かれています。

私たちが真の愛に生き、神の国に迎え入れられるように、アッシジの聖フランシスコの祈りを唱えましょう。

「神よ、私に理解されるよりも、理解することを、愛されるよりも、愛することを望ませてください。」

2022年度の四旬節黙想会 於 4月3日

黙想指導：ノノイ・プラザ神父

テーマ：神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された

今年の黙想会の講話は神様の愛についての短いお話とその後の祈りに満ちた黙想を行う予定です。 研修委員会

宝塚黙想の家からのお知らせ

■ 日帰り黙想会 10:00~15:30

3月8日(火)

指導：稲葉 善章 神父

3月24日(木)

指導：染野 治雄 神父

3月25日(金)

指導：山内 十束 神父



■ 一泊黙想会

3月8日(火) 17:00~ 9日(水) 15:30

指導：稲葉 善章 神父

3月25日(金) 17:00~26日(土) 15:30

指導：染野 治雄 神父

■ カトリック教会のカテキズム

第2・第4 水曜日 10:00~12:00

指導：染野 治雄 神父

教会の教えを学んでみたい、もう一回学び直してみたい方、カトリック教会のカテキズムと一緒に読み、教会が何を教えてきたのか、伝えようとしているのかを学びます。

■ 聖地エルサレムを学ぶ

第3 木曜 10時~12時、

指導 笹田六合豊 修道士

聖なる都エルサレム、この神秘的な都は、私たちが知らない魅力や秘密があふれています。何度も聖地を訪れて、研究しているBr. 笹田がエルサレムや周辺の世界を学ぶ旅をお手伝いします。このクラスに参加して、エルサレムを満喫しましょう。

■ ギリシャ語で味わう聖書のことは

第1 火曜 10時~12時、

指導 稲葉善章 神父

聖書をギリシャ語で読んだら楽しいだろうと夢見る人は多いでしょう。一日一文、単語ひとつひとつ、一緒に読み、発音し、味わっていくなら、それは夢ではありません。ギリシャ語で聖書を味わってみたい方、ぜひ夢をかなえにいらしてください。

■ 聖書の基本

第1・3 水曜日 10:00 ~ 12:00

指導：山内 十束 神父

聖書を読むことが苦手、どう読んだらいいのかわからない方、基本的な知識や読み方を学んでみるクラスです。

上記の各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。☎ 0797 (84) 3111

財務こぼれ話 第六回

財務委員会

「1円を笑うものは1円に泣く。」たかが1円と粗末にはしてはいけない、たとえ1円でも足りなければ何も買えない。小さい時に母にお金の大切さを教わりました。

小銭であっても積もれば大きなお金になりますし、小銭を少しずつ貯金箱に貯めて、教会の献金にするのは小学生の頃の私の楽しみでもありました。

でも、残念なことに、今やその小銭貯金は喜ばれないものになってしまっています。献金を銀行に入金するとき無料で入金できる硬貨の枚数は、かつては無制限だったのに、一昨年から500枚までとなり、この2月からは100枚までになってしまいました。

さらに、郵便局で入金するときATMに硬貨を入れれば、110円の手数料がかかるようになりました。ATMや窓口で送金するときにも現金なら同様です。

毎日曜日の堂内献金をどのように預け入れればよいのか、財務では苦慮していま

す。

さらに問題なのは四旬節やクリスマスにお願いしている「愛の献金」です。以前は瓶一杯の1円玉貯金（1,000円近くありました）や、10円玉や5円玉のたくさん混じった献金を頂くことはとてもありがたかったのです。でも、もし今1,000枚近くの1円玉を銀行に持ち込めば、なんと1,100円の手数料がかかるのです！

皆様が大事に貯めて納めてくださった献金です。財務もいろいろと工夫し、考えて入金していきたいと思いますが、もし、何か小銭両替によりアイデアがあれば、是非財務までお知らせください。また、献金をして下さるときに、小銭が今そのような状況に置かれていることにご配慮頂けるなら、本当に助かります。

そのうちスマホをかざしてチャリ〜ンと音を立てながら献金するような日が来るのでしょうか？何かが違う気がするのは私が古い人間だからでしょうか？

みんなの談話室

『古代日本の官僚—天皇に仕えた怠惰な面々』
(中公新書) を読んで 直

あなたが(わたしも)国家の意思決定にかかわる高級官僚だったとする。天皇と顔あわせて上奏することもあるほどの身分。正月元旦、大極殿には天皇がおでまし。新年を祝う儀式(朝賀儀 ちょうがのぎ)が執りおこなわれるから。出席を求められた臣下のひとりとして威儀をただし、直立不動で微動だにせず天皇にお祝いを申しあげる—あなたも(わたしも)そうするかも。なんせここは「宮中」である。二一世紀の

われわれは身も引き締まりそう。ところがである、飛鳥・藤原京、あるいは平城京に都がおかれていた一三〇〇年前の律令国家の時代、朝賀儀をさぼる高級官僚(五位以上の高級官人)が実はいた。六位以下の官人になると欠席はもっとひどく、天皇が待てど暮らせど、なんと臣下のほうがお出ましにならない。なかには意図的サポーターまで・・・

「さぼり」が出たのは正月の朝賀儀だけでもない。任官儀（にんかんのぎ）もそう。中央・地方の主要官人は天皇臨席の場で、担当大臣からひとりずつ名前を呼ばれて任官される。入社式で社長から辞令をうけとる新入社員を連想すればいい。晴れがましく名誉だとわれわれなら思う。ところが、信じられないことに上級官人、下級官人を問わず「無断欠席が多数に上った」（52）。律令国家日本の宮中元旦風景といい、任官儀といい、天皇への畏怖の念が当時の官僚には弱かった。天皇自身も中国の絶対君主がもっていたような圧倒的な権力はなかった、という。（天皇が「現人神」（あらひとがみ）などと祭りあげられたのは明治維新以降、それも旧憲法が発布されてから）政府も手をこまねいていたわけではなく、「さぼり官人」にたいし繰り返し罰則を法令化した。それでも劇的改善はむずかしかった。なぜか一基本的に高級官人の身分は生まれや家柄によって保証され（納税義務を免除された者も多かった）、現代のように能力主義に基づく結果第一主義ではなかったから。私たちから見た生ぬるいそうした官人対策は、しかしやむを得ないものだった。

もっと言えば律令国家発展のためにはそれがよかった。七世紀半ばの大化の改新以来、唐にならって日本も中央集権体制をしくが、中国と比べ国家としての体裁はやはり弱い。時間が必要だった。一朝一夕で絶対天皇の君臨する統一国家はできなかったのである。そんななか兄天智のあとをついだ天武（大海人皇子）は中央集権体制を支える担い手たる官僚操縦に苦勞する。壬申の乱で反天武派だった豪族も健在だったし、統一国家の柱となるこれら多くの官人を、この天皇はなにより必要としていたから。手足となって働いてくれる人材が不足気味だった。律令体制の担い手たる彼ら官僚を組織としてスムーズに動かすためには、少々のことなら天皇も目をつぶるしかなかった。中国のような「儒教道徳」も当時の日本には根づいておらず、忠君を強制

しなかった（できなかった）。

公務は適当に片付け、どうしたら楽をして面倒くさい仕事はさけながら、ふところを潤すか、そのほうにエネルギーを使っていた官人も少なくはなかったらしい。政府も徹底して彼らを糾弾はしなかった。グータラ官人たちをいかにうまく使うか、その落としどころを模索して妥協した。双方とも大人の知恵を発揮して「現実的でしたたか」（224）だった、とか。

ひるがえって現代日本の官人たる高級官僚はどうだろう。ずいぶん頑張っているのではないか。良く働くのではないか。任官式の無断欠席者などいないことだけは間違いない。私腹を肥やすものも出ない。制度と社会の目が許さない。にもかかわらず現代日本では「官僚」と聞くだけで顔をしかめる（特にマスコミ関係の）人が多すぎるように、わたしには見える。森友問題にあるとおり、一部官僚のリーダーシップがあやまつことはある。だが大多数の官僚は国民の負託にこたえようと働いている、と信じたい。優秀なかれらが刻苦奮励、滅私奉公に徹してくれれば（ちょっとムリか？）統治機構の各部門は切磋琢磨、その結果として国家はスムーズに効率よく動く。官僚への建設的批判は必要。だが責任ある立場におかれたこの指導グループへの批判は、是々非々をわきまえた洞察力に基づくべき。われら国民の側にも、そうした良識は必要なんだろう。結果を求め急ぐあまり、角を矯めて牛を殺してはなんにもならない。そんなことを『古代日本の官僚—天皇に仕えた怠惰な面々』は考えさせた。いつの時代にも人の世にスキャンダルはつきものらしい。最近読んだ記憶に残る一冊。

表紙の絵について

マタイによる福音書には、天使がヨハネの夢に現れて、「起きて、子供とその母親を連れてエジプトに逃げ、わたしが告げるまでそこにとどまっていなさい。ヘロデがこの子を探し出して殺そうとしている」と告げる場面が記されている。ヨハネはその夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り、ヘロデ王が死ぬまでそこにいた。

(マタイ 2:13-15)

教皇フランシスコは一昨年(2021年)の12月から始まる一年間を「ヨセフの年」と定められた。今年2月16日の一般謁見演説の中で、教皇は聖ヨセフを「教会の保護者」と位置付ける。福音書にあらわれるヨセフはいつもマリアとイエスを守っており、母子を守る使命が与えられていた。わたしたちはヨセフのように、イエスとマリアを全力で守っているだろうか、と教皇は問いかける。イエスを守るといふことは小さき者を守ることであり、飢え乾く人、見知らぬ人、国を離れざるを得なくなった人、病を患う人々はすべて、ヨセフが守る「子ども」なのだ、と教皇は言う。

今月の19日は聖ヨセフの祭日。表紙の作品はダニエーレ・クレスピ(1598~1639)が1625年ごろに描いた「聖ヨセフの夢」というタイトルの油彩画。ウィーンの美術史博物館所蔵。

編集後記

新型コロナ・ウイルスが出現して以来、私たちの生活は対面する機会を少なくするようになってすっかり変わってしまった。他者とのコミュニケーションを取り合う術が貧弱になって、聞く力も、自己を表現し、解放する力も衰え、型通りの挨拶のみですれ違う。思わず笑いを誘う会話を楽しむことがない。勿論、残念に感じるばかりではなく、これまでになく趣味への集中と本の深読みは上手になったのかもしれない。

そんな2年間に私は聖書100週間のサークルに参加して旧約の一端を読み合う機会が持てて、旧約の神が持つ人類への愛はお節介と思わせる程であったことをされていたが、新約の神である主は自ら受肉を経て、人性を受け入れて、死して復活したように、人が神性を分有するようにするならば私たち人間も永遠のいのちを得ることができると示す程の驚くべき熱意を示されたのを感じた。ユダヤの国がアッシリアに滅ぼされて以来、バビロンの捕囚やペルシャ支配、ギリシャ支配、ローマ支配の苦渋を飲まされているのを見た三位一体の神は700年をかけて旧約から新約への移行を導いて下さったかもしれない。

神に感謝。

インマヌエル